

日琉諸方言の推量表現の諸相

船木礼子（神戸女子大学）

松丸真大（滋賀大学）

日高水穂（関西大学）

仲原穰（琉球大学非常勤講師）

1. 目的

このパネルセッションでは、「推量表現」に焦点を当てて日琉諸方言の対照研究を行う。方言の文法記述が進んでモダリティについての研究も深まりつつある現在、「推量表現」に相当するものだけ見ても、形態論的特徴、構文的特徴、意味的・運用的な制約など、さまざまな様相が観察される。また、現代の標準語では「推量表現」としては使われていない諸形式が方言の体系内でどのような位置づけにあるのかを見ることも、モダリティの史的変化を考えていく上で示唆に富む。「推量表現」をめぐる各方言の多様な報告をきっかけに、参加者とともに日琉諸方言のモダリティについて理解を深めたい。

2. 経緯

発表者らはこれまで、日高水穂氏が主催する方言文法研究会において、『全国方言文法辞典』の記述の拡充を目指して要地方言の条件表現や逆接表現の記述、活用体系の記述などを進めてきた。またデータベースの構築も進め、それらを用いた時空間変異対照研究を多角的な展開を目指している。

2023年からモダリティにとりかかった（高木千恵・船木礼子・松丸真大，2023年3月27日）。まずは日本語記述文法研究会編（2003）を参考にしながら日本語標準語におけるモダリティの捉え方について整理し、本研究での「推量」を「認識のモダリティ」と位置づけ、標準語の「だろう」や「のではないか」の意味的特徴・文構造的特徴を次のように捉えることにした。

意味的特徴 1：命題内容に対する発話時の話し手の判断であること

意味的特徴 2：命題を真として主張していること

文構造的特徴：主に主節末に生起すること

ただ、標準語の「だろう」だけを見ても、表現類型としては「情報系」のなかの「叙述」と「疑問」と「感嘆」にまたがって使われるうえ、「伝達のモダリティ」の「伝達態度」や「丁寧さ」にも広く使われているように、ひとつの形式が担う表現の幅は広いことがある。

さまざまな立場、考え方があがるが、諸方言の対照の出発点として標準語の「だろう」の性質を中心に据えつつ、同じ枠組みで諸方言のそれぞれの形式について記述できるようにした「推量表現 共通調査項目」を作成した（2023年9月3日）。

現在、この「推量表現 共通調査項目」に沿って要地方言の調査を行い、推量表現の項目記述の準備を進めると同時に、調査結果について方言文法研究会研究例会 2024#1（2024年3月2・3日、於：関西大学／オンライン）で報告や検討を行ってきた。

3. このパネルセッションの構成

このパネルセッションでは、まず「推量表現 共通調査項目」について説明したあと、標準語と似た体系であっても部分的には異なる京都市方言の例に言及する。次に、標準語の「だろう」とは異なるタイプの形式をもつ広島県三次市方言、沖縄語首里方言、高知方言の推量関連表現について発表する。

発表1：「推量表現 共通調査項目」の概要／京都市方言の推量表現

発表2：広島県三次市方言の推量関連表現

発表3：沖縄語首里方言の推量関連表現

発表4：高知方言の推量表現

最後にまとめとして、諸方言を対照することによって見えてきた推量表現の方言間の異同や特徴について整理し、理解を深めていきたい。

質問は、フォームでも受け付けております。右のQRコードまたは下記のURLからフォームに入り、ご入力ください。



<https://forms.gle/2369Syr3zHDPmpCn7>

参考文献

大西拓一郎編（2006）『方言文法調査ガイドブック 2』科研費報告書

風間伸次郎（2011）「テーマ企画：特集 モダリティ まえがき」『語学研究所論集』16, pp.29-55, 東京外国語大学

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』, くろしお出版

付記

このパネルセッションは、科学研究費補助金基盤研究（A）『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開（課題番号：20H00015, 代表者：日高水穂）の研究の一環のものである。